

【論文】

アートによる地域再生の今日的様相

——横浜市初黄・日ノ出町地区における安全・安心
まちづくりと芸術不動産事業に着目して——

笹島 秀 晃

要 旨

1970年代以降、欧米諸国で、アートをはじめとした文化活動による都市再生事業が興隆してきた。アメリカにおける、ボルチモアのハーバー・プレイス、ニューヨークの SoHo などは、その典型であった。デヴィッド・ハーヴェイ David Harvey、マニユエル・カステル Manuel Castells、シャロン・ズーキン Sharon Zukin が指摘しているように、脱工業化・金融化した経済、動揺する集合的アイデンティティ、治安をめぐるリスク管理を背景に、現代社会の都市の文化的空間は、社会の周辺的な領域ではなく、諸権力が拮抗する都市変動の主な舞台である。

本稿では、こうした論点をうけ、都市と文化をめぐる今日的な様態を明らかにするために、現代日本の都市に焦点をあて議論を進める。対象は、神奈川県横浜市中区、黄金町、初音町、日ノ出町地区における、アート・プロジェクトと安全・安心まちづくりによる地域再生事業である。全国的に例を見ない特殊飲食店（主に外国人売春婦による風俗産業）の密集地帯であったに黄金町界限は、地域住民、NPO、大学、警察、自治体の集約的な実践の中で一新され、アートによって新たな空間が創出されようとしている。本稿では、資料分析と現地調査を通して、初音町・黄金町・日ノ出町再生事業の背景にある、現代社会の構造的背景を明らかにする。

1 はじめに

地域の再生の中で、アートが注目されるようになってひさしい¹⁾。戦後日本の文脈で言うならば、1970年代、当時の首相大平正芳や、神奈川県知事長洲一二らの「文化の時代」という言葉に象徴されるように、地方都市において文化ホールの建設が相次いだ。また1980年代以降、国の助成事業の拡大や、より芸術的専門性の高い公共施設の建設が進められた（佐藤 1999）。1990年代以降では、美術館などのハコモノだけでなく、地元住民も巻き込んだアート・プロジェクトがまちづくりの文脈で注目を集めている²⁾。

本稿で取り上げる、神奈川県中区黄金町、初音町、日ノ出町（以下、初黄・日ノ出町地区）において、2000年初頭からはじまる再生事業は、

アート・プロジェクトと安全・安心まちづくりの推進によって、まちづくりの文脈で注目を集める事例である（田邊 2008; 美術手帳 2008）。全国的に例を見ない特殊飲食店（主に外国人売春婦による風俗産業）の密集地帯であったに初黄・日ノ出町界限は、地域住民、NPO、大学、警察、自治体の集約的な実践の中で一新され、アートによって新たな空間が創出されようとしている（表1参照）。特に、特殊飲食店の密集地域であった黄金町において、2006年以降見られる世帯数の増加は、再生事業が地域に大きな影響を与えたことを示している（表2参照）。

初黄・日ノ出町再生事業については、活動に参加した当事者たちを中心に、すでにいくつかの先行研究が見られる（黄金町バザール実行委員会 2008, 2009; 鈴木 2008, 2009; 鈴木ほか 2010; 山野 2010）。2008年に実施されたア

表1 初黄・日ノ出町再生事業年表

年	出来事
1998年	京急高架補修工事により、高架下の小規模店舗が、周辺地域に拡散・拡大
2002年	初黄・日ノ出町地区風俗営業拡大防止委員会発足
2003年	初黄・日ノ出町環境浄化推進協議会発足
2004年	中区から国へ要望書提出(7月)(売春防止法の罰則強化、不法滞在者の取締り強化)
2005年	神奈川県警が歓楽街総合対策推進本部を設置し、バイバイ作戦を開始(1月11日) 神奈川県警が京急高架下に歓楽街総合対策現地指揮本部を設置(4月) 初黄・日ノ出町環境浄化推進協議会・まちづくり推進部会発足
2006年	地域防犯拠点ステップ・ワン開所(3月) BankART 桜荘オープン(6月)
2007年	安全・安心まちづくり拠点 Kogane-X Lab.オープン(6月) 京急高架下文化芸術スタジオの設計ワークショップ(9月～12月) 黄金町バザール(Kogane-X アート・フェスティバル)実行委員会設立(11月)
2008年	黄金町バザール開催(9月11日～11月30日) 特定非営利活動法人黄金町エリアマネジメントセンター設立総会(11月)
2009年	特定非営利活動法人黄金町エリアマネジメントセンター発足(4月1日) 黄金町交番開所式(4月16日) 日ノ出町地域防犯拠点ステップ3竣工(9月) 黄金町バザール2009開催(9月1日～9月27日)

出典)「Kogane-X 初黄・日ノ出町環境浄化推進協議会」web サイト(2010年8月13日取得 <http://kogane-x.koganecho.net/>)

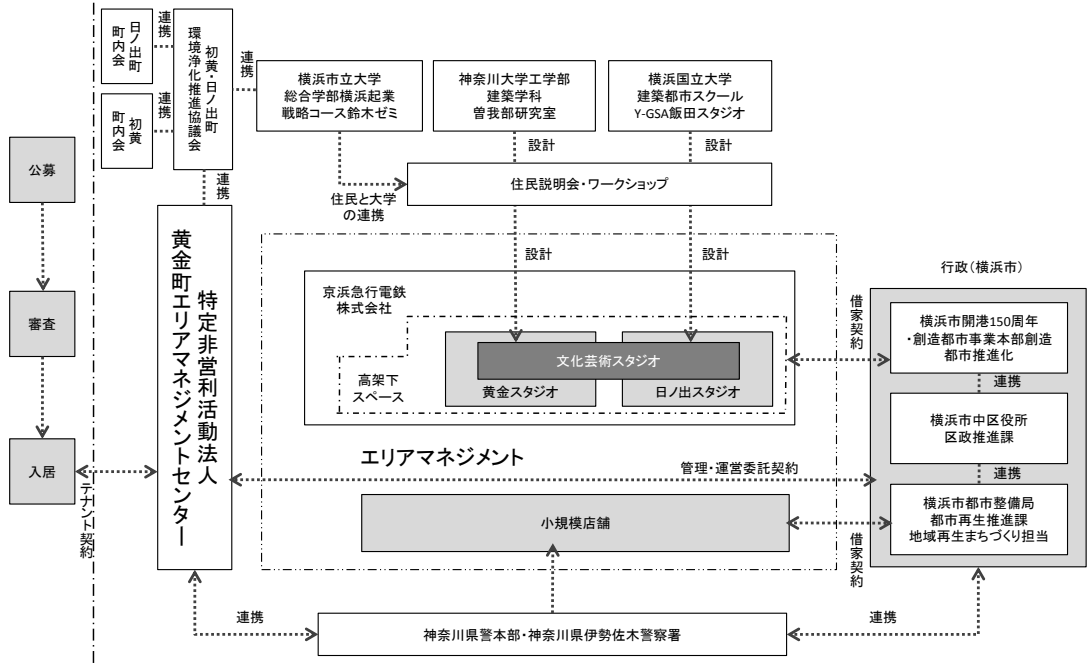
表2 日ノ出町・初音町・黄金町世帯数動態(1998～2010)

	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010
日ノ出町全体	740	718	741	775	790	881	883	879	912	870	919	1007	1004
1丁目	425	417	421	456	478	488	486	479	501	488	480	487	485
2丁目	315	301	320	319	312	393	397	400	411	382	439	520	519
初音町全体	624	632	652	652	671	706	721	771	855	918	942	977	996
1丁目	269	271	272	264	276	276	290	295	288	303	328	314	342
2丁目	170	173	173	196	209	229	208	220	309	322	327	360	352
3丁目	184	188	188	192	186	201	223	256	258	293	287	303	302
黄金町全体	79	75	75	57	60	64	62	53	66	112	158	178	177
1丁目	49	49	49	42	44	49	47	41	51	99	143	162	163
2丁目	30	26	26	15	16	15	15	12	15	13	15	12	14

出典)横浜市ポータルサイト・「中区町別世帯と人口」(取得日:2010年11月5日 <http://www.city.yokohama.lg.jp/ex/stat/jinko/cho/new/naka.html>)

ート・イベント「黄金町バザール」の実行委員長であった横浜市立大学の鈴木伸治は、「文化芸術による地区再生と安全・安心のまちづくり」の観点から、2005年に警察によって行われた黄金町浄化作戦とその後のアートによる再生事業を紹介している(鈴木 2008; 2009)。またNPO「黄金町エリアマネジメントセンター」の代表である山野真悟は、NPOが行うアート・プロジェクトの概要、また地域再生の仕組みとして、「地

元の協議会を軸とし警察・行政・大学が連携して協同するシステム」、「小規模店舗の活用(横浜市の借り受け施設の活用)」、「エリアマネジメントという概念の実践」の観点から、再生事業を位置づけている(山野 2010)。先行研究を見ると、初黄・黄金町界隈の再生事業は、1)警察によって進められる特殊飲食店の浄化作戦と、その後の安全・安心のまちづくり、2)借り上げ物件をアートの活動の場に転換していく芸術不



出典) 鈴木 (2009)、山野 (2010)

図1 初黄・日ノ出町再生事業連携図

動産事業³⁾、3) 地域住民、NPO、大学、自治体、警察の緊密な連携によって進められる集約的活動、といった特徴をもつ事例であることがわかる。

先行研究における初黄・日ノ出町の事例の分析は、執筆者の多くが活動の当事者によるためか、モデルケース的に実践の先進性を評価するものが多かった。しかし、初黄・日ノ出町地区は、「ちょんの間」（詳細は後述）と呼ばれる特殊飲食店が、狭い地域に密集した、他に例を見ない地域である。それゆえに、そこでとられたまちづくり手法も、ある種例外的な要素を含み、地域再生の実践モデルとして一般化して評価するためには、慎重な吟味が必要とされるはずである。しかし、こうした視点は先行研究では、あまり見られなかった。それゆえに本稿では、この吟味の一作業として、社会学的な知見を援用しつつ、先行研究ではなされてこなかった、初黄・黄金町の事例の特殊性と抽出可能な一般性を整理する。

その際、注目するのは、地域住民、NPO、大

学、自治体、警察の緊密な連携と協同をめぐる社会的背景である。黄金町においては、地域住民によって組織される初黄・日ノ出町環境浄化推進協議会・川の駅運営委員会・大岡川桜まつり実行委員会をはじめ、NPOである黄金町エリアマネジメントセンター、大学（横浜市立大学・横浜国立大学・神奈川大学）、横浜市（都市整備局・安全管理局・APEC 創造都市事業本部（前開港150周年・創造都市事業本部））、警察（神奈川県警察本部・伊勢佐木警察署）、京浜急行電鉄株式会社などのアクターが、毎月の定例会に集い、まちの再生を議論するなど、緊密な連携に基づく事業運営がなされてきた。

緊密な連携の要因としては、地域住民による主体的な働きかけと活動が、第一に考えられる。初黄・日ノ出町の再生事業において、地域住民の活動は、NPO、大学、自治体、警察の活動が進展する重要な素地を形成していた。しかし他方で、現代社会の都市空間をめぐる構造的な背景、また特に日本の歓楽街をめぐる社会的な趨勢の中で、それぞれの実践や活動が、接合し、

連携されやすくなっていたことにも目を向ける必要がある。例えば、2005年以降黄金町において、警察によってすすめられた一斉摘発は、2003年以降の石原慎太郎東京都知事によって牽引された歓楽街浄化の潮流のただ中で、地域住民の求める特殊飲食店の摘発要求に応える形で実施され、連携につながっていった。摘発された後の空き店舗の活用をめぐって導入されたアート・プロジェクトも、創造都市行政という、日本全国に広まる脱工業化時代の自治体成長戦略の潮流の中で、行政から提案されたものであった。

本稿では、協同の要因として、地域住民の主体的な活動や、他のアクターによる実践の先進性以外の、再生事業の背景にある要因に注目して検討を進める。地域住民の主体性と戦略は、効果的に接合しうる地域の構造的背景があってはじめて達成されるものである。初黄・日ノ出町再生事業の背景にある社会的要因としては、特に、横浜市によって2004年以降進められる「創造都市」施策と2000年以降国・警察によって進められた「安全・安心まちづくり」の二点である。

自治体による文化産業を中心とした成長戦略と国・警察によるリスク管理は、近年の都市社会学理論においても、都市の文化的空間を構成する重要な審級として指摘されてきた (Zukin 1995; 2009)。公園などのパブリック・スペース、カフェやギャラリーが集う現代都市の文化的空間は、アートやその他の文化的活動が意図する／意図しないにかかわらず、管理的な諸力が拮抗する場となっている。初黄・日ノ出町地区の場合も、芸術不動産事業によって建設されるアート・スタジオや地域の景観は、自治体と国・警察による実践の中で構築されている。

重要なのは、特に黄金町の場合、現代の文化的空間をめぐる潮流を象徴しているというだけでなく、特殊飲食店の密集地区という地域の特殊性により、自治体と国・警察の諸力がより強固に集約しえたと言う点である。外国人売春婦や人身売買といった地域問題の特殊性は、喫緊の解決が望まれる社会問題として、異なるア

クターの合意形成を進める要因となった。また、500メートル圏内に250もの特殊飲食店が密集する空間的限定性は、環境浄化後のビフォー／アフターを景観的に明確な形で知らしめる側面ももち、結果、アクターそれぞれの行動のインセンティブ形成を進める一因となった。黄金町の場合、現代社会の文化的空間をめぐる管理的な諸力の関係性が、特殊飲食店の集積という特殊な条件ゆえに、集約し緊密に接合しうる条件を形作っていた。自治体、国・警察などの同時代的な実践が、地域住民の主体的な活動と共振することによって、地域におけるアートという審美的な実践に収斂し、短期間のうちに劇的な空間の変化をもたらしたのである。

本稿は、こうした論点をより明示的に示すため、初黄・黄金町再生事業の進展を通時的に整理しつつ記述していく。方法は、各種の行政資料、NPOの活動報告書などを中心とした資料分析、加えて補完的なフィールドワークと聞き取り調査である⁴⁾。調査初黄・日ノ出町事例の再生に関しては、現在進行形の事例ではあるものの行政資料、NPOの報告書など一定以上の蓄積が見られる。本稿のアプローチは、詳細な現地調査に基づいた事例の内在的な分析にはほど遠いが、現時点までの各種資料と部分的な現地調査をもとに、先行研究で提示されなかった新たな視角という点で、有用な知見を提示できると考える。

なお、事例の社会背景に着目する本稿の視点は、通説的な構造決定論とは異なるものであることにはあらかじめ留意されたい。構造と行為は、再帰的な関係にあり、構造はあくまで行為の可能性を縮減するものに過ぎない。同時に、本稿の試みは、当事者それぞれの活動の意義と先進性を矮小化することを意図して行うものでもない。黄金町の実践において、優れた人材や組織が存在することで事業が達成された側面は大きく、警察、横浜市の実践も、地域住民の積極的な活動があってはじめて達成されたものであった。本稿が、社会背景に注目するのは、初黄・日ノ出町で取られた実践のコンテクストを提示することで、安全・安心やアートを中軸に

据えた都市再生手法が、どこまで他の地域に転用可能で、どこからが転用不可能かを吟味する際の、1つの重要な手がかりになると考えるからである。

2 初黄・日ノ出町地区の歴史 — 黄金町と「ちょんの間」 —

再生の実施地区である初黄・日ノ出町は、関内駅から1kmほど西、京浜急行の高架橋、大岡川、平戸桜木道路沿いに位置する。日ノ出町から初音町をとおる平戸桜木道路沿いは商店なども並び、現在では衰退が見られるが、この界隈が問屋街であったことを忍ばせている。

他方、特殊飲食店が密集していた旭橋から太田橋の間500メートルの範囲でひろがる黄金町の路地裏に目を向けると、一時は250もあった「ちょんの間」と呼ばれる店舗が、2005年の警察の一斉摘発によってもぬけの殻となり、現在、一部は改装されているが未だに店舗跡の多くが残されている。

「ちょんの間」とは、一階がスナックといった飲食スペース、二階が売春行為を行う部屋、それぞれが約11m²の広さからなり、1階と2階併せて計22m²程度の、特殊飲食店の店舗である。こうした形状の空間が、一戸の建物を分割するように設えられ、裏通りに立ち並ぶ。そこでは以前、夜ともなると、下着姿などほぼ半裸の売春婦が、一階の建物入口に立ち客引きをしていた。その当時の状景を、八木澤は下記のように描写している。



図2 関内区域地図



図3 黄金町地図、および借り上げ物件分布

ピンクのネオンがこぼれる店先に立つ濃い化粧の女性たちはマネキンのようだ。

「お兄さん、遊び？」

「チッ、チッ、チッ」

舌打ちして目を引こうとする女性もいる。セラー服を来た東南アジア系の女性と目が合った。彼女はあやしげな笑みを浮かべ、にっこりと微笑んだ。そこは日本ではないというような錯覚に一瞬陥る。

幅二、三メートルほどの通りを歩く客は、スーツを来たサラリーマンや作業着姿の若い肉体労働者が多く、誰もが、女性たちを品定めしながら歩いている。中には人気のある女性もいるのだろう。カーテンが閉まった店先で、数人の男たちが順番待ちをしている。チャイナドレスを着て店先に立つ女性に値段を尋ねると、「三〇分、一万円」と微笑みながら行った。

客の男たちに混じって、路地の辻々には、明らかに客ではない男たちの姿があった。店の経営者やヤクザのようだ。(八木澤 2006: 34)

黄金町のちょんの間背景には、第二次大戦後の闇市から続く初黄・日ノ出町界隈の歴史がある。場所の履歴を探るなかで、再生前の複雑な黄金町の問題状況を概括することから始めよう⁵⁾。

第二次大戦後、関内関外地区の多くの場所が米軍に接収をうける一方で、野毛一帯は接収を逃れ、伊勢佐木町や長者町方面で商売を営んでいた人々がこの地域に移り住み始めた。野毛地区では闇市が賑わいを見せると同時に職業安定所もあったことから、黄金町界隈には簡易宿泊所が建設され、復興を支える港湾労働者の多くが集まった。闇市、飲食店、職業斡旋、売春など、戦後の混乱期の中である種のにぎわいもあったであろう。

1952年、接収が解除され、横浜の町も戦後の復興が本格的に始まる。1957年には野毛にあっ



写真1 ちょんの間 (2010年8月27日/筆者撮影)

た職業安定所が寿地区に移転し、黄金町界隈にあった簡易宿泊所が姿を消すことによって、この一帯も変化していった。ただ、黄金町においては、1958年の売春防止法実施以降も、特に京浜急行の高架下の飲み屋を中心に売春が黙認され、麻薬がはびこるなど荒廃は深まっていた⁶⁾。ただし、当時は飲食店組合があり、ある程度の秩序がまもられることによって、飲食店と近隣住民の間で棲み分けができていたという。飲食店経営者には地域の祭りに参加する人々もあり、町内会費も納められていた。

高度成長を経て1970年代に入ると、風俗産業に従事する日本人女性が減少する一方で、外国人女性を雇う飲食店が増加し始めた。また、1970年代後半以降は、飲食店の日本人経営者が引退しはじめ、働いていた外国人に貸し出すようにもなった。経営者が日本人から外国人に移り変わる中で、外国人経営者は母国から新たな働き手呼び集め、黄金町界隈は外国人売春婦の密集する地域へと変貌していった。外部からの流入者によって特殊飲食店の増加が進む中で、飲食店組合の力は弱体化し、ある種の暗黙のルールが無効になっていった。黄金町の飲食店をめぐる多国籍化は、地域住民が介入できないほどの溝を生み出し、結果として黄金町の状況が悪化する一つの契機となった。

1990年代の初頭までは、外国人娼婦の数は増加していたものの、特殊飲食店は京急電鉄の高架橋下のみ限定されていた。しかし、1995年

の阪神大震災後の一連の耐震補強の気運の中で、1998年の京浜急行の高架下耐震補強工事に伴って進められた、高架下飲食店街の一斉立ち退きは、特殊飲食店を黄金町界隈に拡散させる要因となった。1998年以降、黄金町の特殊飲食店は、2000過ぎの最盛期250店を超えるまでに拡大し、店の増加と共に、そこで働くフィリピン、タイ、マレーシア、コロンビア人などの外国人売春婦の増加、不法滞在、HIV、人身売買の問題など、より事態は深刻化していった（図4参照⁷⁾）。この時期になると、暴力団系の不動産会社や外国人経営者などへの「また貸しのまた貸し」といった入り組んだ賃貸関係が多くなり、複雑な権利関係が特殊飲食店以外の土地利用の障害となっていた。加えて、高額の金銭が動く売春産業にあわせて不動産価格が高額に設定されており、他の業種の参入が難しい状況が生み出されていた。ちゃんの間と呼ばれる特殊飲食店と多国籍化する売春婦、HIVや人身売買の問題、地区の不動産をめぐる複雑な状況が、黄金町界隈の混迷の大きな要因であり、2000年初頭以降はじまる様々な実践は、こうした黄金町の問題を解決するために行われていったのであった。

3 地域住民の運動の始まり

—初黄・日ノ出町内会の環境浄化への動き—

2002年10月、初黄町内会と日ノ出町内会の共同で、初黄・日ノ出町地区風俗営業拡大防止委員会が設立されたことが、地域住民による環境浄化運動の始まりであった。防止委員会は、2001年、特殊飲食店が密集する地域の生活環境の悪化を理由にした、日ノ出地区住人の転出の相談をきっかけに、日ノ出町内会長から初黄町



図4 黄金町特殊飲食店分布変遷

内会長に提案されたことによって設立された。住民が転出し、その土地が売られれば、違法な店が町内に一気に広がる恐れがあったことが設立の理由であった。防止委員会は、転出引き留めの説得や、他の町内会との連携、行政への働きかけを行っていった。こうした町内会同士の連携は、数年前から始まった大岡川桜まつりによって、地域の町内会長達の間でつながりの素地ができていたことにも起因していた。

2003年には、防止委員会が拡大し、初黄・日ノ出町環境浄化推進協議会が発足した。初黄・黄金町近隣の東小学校のPTAも浄化運動に参加し、自治会活動は、より組織化の程度が強まっていく。東小学校児童の通学路のすぐそばに、特殊飲食店が軒を連ねており、通行途中にも容易に路地が見える環境が問題視され、地元の小

表3 初黄・日ノ出町環境浄化推進協議会・部局別活動内容

部会名	活動内容
まちづくり推進部会	まちの将来像策定／まちづくりプログラム策定と合意形成／ Kogane-X Lab.の運営・活用／コミュニティスペースの活用／ 定例会の開催（他の部会に関する議題の連絡調整を含む）
環境浄化推進部会	防犯パトロール／清掃活動／啓発看板等の設置や撤去／ 「日よけ型」テント看板の撤去
大岡川環境整備部会	大岡川プロムナードの整備と検討／川の駅運営委員会との調整／ 川の駅周辺の整備と検討／大岡川流域を中心とする清掃活動
イベント・広報部会	イベントの企画・実施（大岡川桜まつり、黄金町バザール等との連携）／ 計画にあわせた戦略的広報の実施／まちづくりニュースの編集・発行

出典) Kogane-X 初黄・日ノ出町環境浄化推進協議会ホームページ (<http://kogane-x.koganecho.net/info/overview.html>)

学校の参加につながったのであった。協議会の活動内容は、2004年から発行されている広報誌『初黄・日ノ出町まちづくりだより』をみると、「活動の柱」として、「1. 協議会自主活動の推進」（パトロールや清掃活動）、「2. 大岡川の環境整備推進」、「3. 法制度に関する要望」（売春防止法などの罰則強化の要望）、などが挙げられている（初黄・日ノ出町環境浄化推進協議会 2004-2006, 2006, 2007-2009）。

地域住民の活動の中で、中区役所も要請を受け、特殊飲食店拡大防止に向けた活動や、まちづくり活動の支援などを始めていった。2004年7月、協議会と中区が、売春防止法の罰則強化、不法滞在者の取締り強化をもちこんだ、国への要望書を提出したことは、連携の成果であった。

2005年、地域住民の活動はより組織化され、以後のNPO化にもつながる活動の進展が見られた。協議会は、「まちづくり推進部会」、「イベント・広報部会」、「大岡川環境整備部会」、「環境浄化推進部会」の四つの部会に分けられ、より組織的な地域再生のための活動が進展していった（各部会の活動内容に関しては、表3を参照）。

初黄・日ノ出町地区では、戦後、違法風俗営業や麻薬問題のため、何度か住民運動が行われてきた。しかし、当時の日ノ出町内会会長は、今回の運動に関して、「このまちを将来どういうまちにするか」という、まちづくりの視点が加わったことによる新しさを指摘している（黄金

町バザール実行委員会 2008 2008: 125)。自治会レベルでの、先進的な活動は、その後の警察の介入、国の援助、横浜市のバックアップを支える根強い基盤になった。定期的なパトロールや、現代アートを用いた地域再生手法も、地域のつながりと解決へと向けた住民の柔軟な姿勢があって初めて実現したものであった。しかし、当時の初黄町内会長がインタビューの中で述べているように、住民運動の背景には、実践を後押しする社会情勢があった。

私たちが一生懸命やりましたが、いろいろなことがうまく運んでいった、という面もありました。どうしようか悩んでいたときに小林さんから声を掛けられて、はじめは何の支援もなかったのが、そのうち行政も協力してくださり、国レベルでの支援まで得られたのですから。（黄金町バザール実行委員会 2008 2008: 126）

当事者が、「いろいろなことがうまく運んでいった」という背景は、警察による一斉摘発と内閣府都市再生事業本部による安全・安心事業、横浜市中区役所にはじまり後に横浜市の都市整備局に移行される特殊飲食店の借り上げ事業、そして横浜市創造都市推進化によって進められる創造界隈事業である。以下、国・警察の流れを第4節で、自治体については第5節で、順に検討していくこととする。

4 警察による特殊飲食店の一斉摘発 —安全・安心のまちづくり—

初黄・日ノ出町で変化の嚆矢となったのは、2005年、警察・自治体・地元住民による一斉摘発であった。2005年1月11日に、神奈川県警は歓楽街総合対策推進本部を設置し、「バイバイ作戦」と名づけられた一斉摘発事業を開始した。作戦の内容は、違法特殊飲食店への立ち入り調査、売買春関係者の一斉逮捕、所有者、使用者に対する売買春禁止の明確化、などであった（鈴木 2009: 63）。作戦開始当初には、夜間でも警官50人が動員されるなど、集中的な取り締まりが行われた（『朝日新聞』2005.1.14 朝刊, 神奈川面）。同年4月には、京浜急行高架下に歓楽街総合対策現地指揮本部が設置され、警察官が40人体制で24時間取り締まるなど、集中的、継続的な活動が続けられた。（『朝日新聞』2005.4.3 朝刊, 横浜・1 地方面）。図4を見ると、2005年の一斉摘発後、2006年には大きな変化があったことがわかる。こうした集約的な摘発により、現在では、数店を除いてすべての特殊飲食店が閉店している。

2005年から開始される「バイバイ作戦」は、地域住民の要請に警察が応えたという側面もあったであろうが、留意しておかなければならないのは、都市空間のリスク管理をめぐる2000年以降の国と警察の趨勢である。近年の体感治安の悪化の中で、2000年の警察庁による「安全・安心まちづくり推進要綱」の施行をきっかけに、全国で生活安全に関わる自治体条例が作られていく。安全・安心まちづくりの潮流は、防犯の対象が犯罪そのものから、犯罪を取り巻く秩序違反へ、すなわち「割れ窓理論」に示される犯罪の温床となる環境的無秩序の是正へと向かっている（吉原 2007: 28）。その中で、石原都知事によって進められた2004年の歌舞伎町浄化作戦は、安全・安心まちづくりにおける環境浄化型治安維持対策のモデルケースとなった。

2004年の歌舞伎町浄化作戦に期を合わせる

ように、黄金町においても、2004年11月警察庁長官の視察、12月に県警本部長による摘発を明言する会見などが行われた。2005年6月には、内閣府都市再生本部によって、歌舞伎町浄化のモデルケースを全国的に拡張させることを目指した「防犯対策などまちづくりの連携協同による都市の安全・安心の再構築」が創設されるが、黄金町は、対象地区となる全国11の歓楽街の一つに選ばれている⁸⁾。都市再生本部による再生プロジェクトへの認定は、黄金町再生事業の柱の一つであった環境浄化の試みが、2000年以降の国と警察の潮流の中にあることを示す象徴的な出来事であった。

2005年以前において、黄金町でも警察の大規模な摘発はあった⁹⁾。しかし、ほとぼりが冷めた頃に経営者が戻り、いつの間にか以前と変わらない特殊飲食店街となっていた。2005年以降の黄金町の一新は、警察の集中的な取り締まりと、住民のパトロール活動による草の根の基盤作り起因する。他方で重要なのが、一斉摘発された後の空き家となった空間が、再び元の特殊飲食店へと戻らないように、不動産そのものを借り上げる自治体の試みであった。浄化活動のみで再生への試みを終わらせてしまうのではなく、不動産そのものを管理し新たな活動の拠点として利用することで、以前の状況に後退することを避けつつ、新たな街が切り開かれたのである。

5 自治体による芸術不動産事業 —不動産の借り上げと創造界限事業—

中区役所は、先述したような複雑な黄金町の不動産権利関係を警察との協働のなかで整理し、自治体による借り上げ事業という形態をとり、以後特殊飲食店として使用されない基盤作りを進めていった。不動産の借り上げ事業は、比較的権利関係が明確なところから、2003年に一軒（地域防犯拠点「ステップワン」、およびアート・スタジオ「BankART 桜荘」として使用）（立地については図3参照）、2004年に一軒と進めら

表4 関内区域のオフィス空室率変遷

年	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008
空室率	13.79%	12.75%	10.81%	11.45%	14.06%	13.80%	12.21%	8.69%	7.06%	6.10%	6.95%

出典) 三鬼商事 (2009)

れていった。2007年以降、借り上げ事業の拡大に伴う費用の増加から、中区で行われていた事業は横浜市に移行し、2008年には、借り上げ物件が特殊飲食店 13 店舗、一般建物 3 カ所、買取 1 件に¹⁰⁾、現在では、特殊飲食店が 33 店舗、高架下スタジオ 2 棟、その他の物件借り上げ 15 店舗など、約 50 店舗まで拡大している¹¹⁾。

2004年にオープンした BankART 桜荘の事業主体である BankART1929 は、横浜市の創造都市事業の中心的な役割を担う NPO でもある。BankART1929 による不動産の借り上げ事業への参入は、初黄・日ノ出町と横浜市の創造都市事業がつなげるきっかけとなった。以降、初黄・日ノ出町の不動産借り上げ事業は、横浜市の創造都市事業の中に位置づく「芸術」不動産事業として展開し、アート・プロジェクトによる地域再生が段階的に進展することとなった。

横浜市では、2002年の中田宏市長の就任にともない、創造都市行政が開始していた。中田市長は就任直後の市政方針演説の中で、「非『成長・拡大』の時代」という時代背景の認識、「民の力が存分に発揮される社会」という理念を示すと同時に、横浜市のビジョンとして「市民の力が創り出す生活充実都市の創造」、「地域から地球に広がる環境行動都市の創造」、「横浜の可能性を追求する個性発揮都市の創造」の三点を提示している(中田 2002)。特に、三点目の「個性発揮都市」については、2002年にオープンした赤レンガ倉庫に言及しながら、みなとみらい 21 地区、関内・関外、横浜駅周辺などの個性を生かしつつ、都心部全体の回遊性を高めることの意義、観光振興などの都市プロモーションの意義について言及している。

2002年11月、中田市長の意向で、市長の諮



写真2 旧第一銀行 (2008年11月8日/筆者撮影)

問機関として「文化芸術と観光振興による都心部活性化委員会」が設置された¹²⁾。委員会では、当時の横浜の問題として、1) 関内区域の産業構造の変動に伴う、オフィス空室の増加、支店の撤退、2) 関内区域の都市景観の崩壊、が指摘されている(横浜市都市経営局政策部政策課 2002)。2002年当時、関内地区オフィス空室率は、14%を超え衰退傾向にあった(北沢 2008: 6)(表4参照)。また都市景観については、1)「横浜らしい景観の魅力の低下。何処にでもあるような町並み、東京化され、魅力のないマンション群の増加」、2) 飛鳥田市長期の六大事業「都心地区整備計画」の系譜の中で保存された、歴史的建造物が十分に活用されていないこと、3)「ウォーターフロントが顕在化していない、水辺空間の積極的活用が不足」といった問題が指摘されていた(横浜市都市経営局政策部政策課 2002)¹³⁾。

こうした横浜市関内区域の問題状況の中で、活性化委員会は、馬車道にある戦前に建築された古典主義的な建築様式をもつ旧第一銀行横浜支店、旧富士銀行横浜支店の活用を中心として、文化芸術・観光振興による関内区域の活性化プロジェクトを推し進めた(写真2参照)。

表 5 横浜市総予算における創造都市事業費の変遷（2006～2010）

	単位：百万円				
	2006	2007	2008	2009	2010
総予算	3,381,900	3,398,200	3,319,500	3,259,100	3,099,800
対前年比	-2.7%	3.3%	-2.3%	-1.8%	-4.9%
創造都市事業予算	870.27	2,359.40	6,359.00	6,179.92	1,773.68
対前年比	-	368.9%	269.5%	-2.8%	-71.3%
総予算／創造都市事業予算	0.026%	0.094%	0.192%	0.190%	0.057%

出典）横浜市総務課，2006～2010，『予算概要』

表 6 創造都市事業の予算変遷（2006～2010）

	単位：千円				
	2006	2007	2008	2009	2010
戦略的事業誘致	40,000	48,002	162,641	32,000	21,400
文化芸術創造都市の形成	580,270	667,626	1,577,826	1,078,472	834,339
開港 150 周年記念事業の推進	250,000	1,080,655	4,532,867	4,306,000	-
人件費	-	563,117	515,669	564,470	665,200
開港 150 周年雇用対策費	-	-	-	198,982	-
APEC 横浜開催の推進	-	-	-	-	252,741
計	872,276	2,359,400	6,789,003	6,179,924	1,773,680

出典）開港 150 周年・創造都市事業本部，2006-2010，『事業概要』

2004 年 1 月「文化芸術創造都市——クリエイティブシティ・ヨコハマの形成に向けた提言」がなされ、「都心部歴史的建造物の文化・芸術実験事業」の事業主体として、NPO「YCCC プロジェクト」と「ST スポット・横浜」が決定した。2 月には、これらの二つの NPO が統合され、文化芸術活動拠点「BankART1929」として活動開始。4 月には横浜市に「文化芸術都市創造事業本部」が新設されるなど、急ピッチで創造都市の構想と実現が進んだ。

2005 年以降本格化する横浜市の創造都市構想は、5 つの施策からなる。1) 関内の埠頭近辺の再生を目指す「ナショナルアートパーク構想」、2) 歴建造物の保存事業を中心とする「創造境界の形成」、3) メディア・コンテンツ産業の育成・集積を目指す「映像文化都市」、4) 3 年に一度開催される国際アート・フェスティバルの「横浜トリエンナーレ」、5) 諸種の育成事業からなる「創造の担い手育成」、である。

初黄・日ノ出町地区との関係で、特に重要なものが「創造境界の形成」事業である。「創造界

限」とは、横浜都市部の歴史的建造物や倉庫、空きオフィスなどを創造の場に転用し、アーティストやクリエイターが創作・発表・滞在することを通して地域が活性化されることを企図した空間である。具体的な重点地区としては、関内の「馬車道」、「日大通り」、「桜木町・野毛」の三つが指定されている。市は、運営主体となるアーティストや NPO を公募で募り、審査によって決定し、実際の施設の運営に関しては、活動団体の自主的な裁量に委託される。特に創造境界事業の中心的担い手として活動してきた、BankART1929 は、歴史的建造物を拠点に、展覧会、アーティスト・イン・レジデンス事業、カフェやアート・ショップなどを展開し、本事業が定着する大きな推進力となった。

2007 年以降、初黄・日ノ出町地区には、「地域再生まちづくり事業費」という細目で「文化芸術創造都市の形成」事業の中の 14% 程度の予算が投入されている（表 5、6、7 を参照）。この予算規模を見ると、ただ一地区の再生を目指したプロジェクトというよりも、横浜市創造都市

表7 創造都市事業：「文化芸術創造都市の形成」事業・細目変遷（2006～2010）

単位：千円

	2006	2007	2008	2009	2010
創造界限形成事業費	368,186 (63.5%)	252,000 (37.7%)	248,661 (15.8%)	260,520 (24.2%)	266,193 (31.9%)
地域再生まちづくり事業費	-	-	54,642 (3.5%)	82,504 (7.7%)	120,721 (14.5%)
アーツ・コミッション事業費	10,000 (1.7%)	35,000 (5.2%)	59,600 (3.8%)	56,620 (5.3%)	60,420 (7.2%)
映像文化都市づくり推進事業費	94,000 (16.2%)	167,272 (25.1%)	149,200 (9.5%)	86,091 (8.0%)	55,382 (6.6%)
国際的芸術祭開催事業費	-	-	42,000 (2.7%)	81,400 (7.5%)	-
横浜トリエンナーレ事業費	24,000 (4.1%)	117,000 (17.5%)	921,159 (58.4%)	217,583 (20.2%)	84,100 (10.1%)
芸術創造活動推進事業費	3,500 (0.6%)	40,000 (6.0%)	40,910 (2.6%)	58,810 (5.5%)	-
創造の担い手育成事業費	5,000 (0.8%)	19,000 (2.8%)	20,300 (1.3%)	44,222 (4.1%)	25,200 (3.0%)
創造都市市民力継承事業費	-	-	-	-	67,500 (8.1%)
創造都市マザーポートエリア支援事業費	-	-	-	63,275 (5.9%)	15,700 (1.9%)
ナショナルアートパーク構想重点事業費	27,000 (4.7%)	31,000 (4.6%)	35,000 (2.2%)	121,190 (11.2%)	845,00 (10.1%)
創造都市推進費	2,334 (0.4%)	6,354 (1.0%)	6,354 (0.4%)	6,257 (0.6%)	54,623 (6.5%)
その他	46,250 (8%)	-	-	-	-
合計	580,270 (100%)	667,626 (100%)	1,577,826 (100%)	1,078,472 (100%)	834,339 (100%)

出典) 開港 150 周年・創造都市事業本部, 2006-2010, 『事業概要』

注) 表内、() 内の数字は、当年の事業費全体における割合を示す

行政の重要な一事業として初黄・日ノ出町地区が位置づけられていることがわかる。2008年に始まるアート・イベント「黄金町バザール」、「黄金町バザール」終了後から活動を開始するNPO「黄金町エリアマネジメントセンター」は、横浜市の創造界限事業に位置付くことで、活動を展開しているのがあった。

6 アートによる地域の再生

— 黄金町バザール —

初黄・日ノ出町のアート・プロジェクトは、厳密には BankART 桜荘から開始しているが、本格的には、2008年に始まるアート・イベント「黄金町バザール」から始動した。黄金町バザールは、2007年以降の京浜急行高架橋の耐震補強工事終了後の空きスペースの利用法を検討する中で企画された。高架下のスペースは、戦後黄金町の特殊飲食店が集積していた場所であり、スペースの利用法を適切に検討しなければ、摘発後の特殊飲食店が再び戻る可能性もあった。また、黄金町の大きな部分を占める高架橋は、景観の美的面でも重要な要素であった。横浜市

の創造都市推進課は、耐震補強工事終了後の高架下のスペースに、文化芸術スタジオを作することを提案した。さらに、2008年の横浜トリエンナーレにあわせて、アート・スタジオを中心に、アート・イベントを進める計画を立てたのだ¹⁴⁾。

2007年には、「Kogane-X アート・フェスティバル」実行委員会が、横浜市立大学の鈴木伸治、2005年の横浜トリエンナーレのキュレーターであった山野慎吾、横浜美術館の学芸員であり山野と共に2005年の横浜トリエンナーレのキュレーターでもあった天野太郎によって開かれた。高架下には、二つのスタジオが建設される予定が進み、神奈川大学の曾我部昌史、横浜国立大学の飯田善彦が設計を行った。建築プロセスには、ワークショップという形で地域住民との対話が取り入れられ、現代アートに対する地域住民の理解が広まっていく一つの契機となった。また、神奈川大学、横浜国立大学、横浜市立大学といった地元の大学生が建築プロセスに参加したことによって、地域の理解が得られやすくなったこと、その後の黄金町のプロジェクトに、恒常的に大学生という若者が流入する経路を作り出したという点で重要であった。こう

して黄金スタジオと日ノ出スタジオが建設された（スタジオをめぐる連携関係については図1を参照）。

2008年9月11日から11月30日、完成した高架下のアート・スタジオ、初黄・日ノ出町区域の借り上げ物件を中心に、アート・イベント「黄金町バザール」が開催された（スタジオの立地については図3を参照）。山野氏によるならば、それは街全体にアート作品や展示施設散らばらせることによって、街そのものを見せることを企図したものであった。参加アーティストは、公募で募られ、実行委員会の審査によって決定された。またバザールでは、単に作品を展示するのではなく、ワークショップ型の参加型のプロジェクト、また単に一過性のアート・イベントにとどまらず、今後の黄金町の再生の方向性を探る試みもなされていた。アーティストだけにとどまらず、デザインなどのその他のクリエイティブな産業、店舗、飲食店などを全体のバランスを取りながら、誘致・維持し、アートの場所だけでなく、産業の創出も目指した、アートにとどまらない中期的な展望も試みられている（黄金町バザール実行委員会2008:8-9）。

黄金町バザール以後は、2009年4月1日、協議会による環境浄化活動の維持とアート・プロジェクトによる再生事業の継続のために、NPO「黄金町エリアマネジメントセンター」が創設された。NPOの活動は、まちづくり活動、黄金町バザールを中心としたアート・イベントの開催、そして借り上げ物件を利用したアーティスト・イン・レジデンス事業に分けられる。黄金町のアート・プロジェクトを位置づけるさい重要なのは、ただ単に集客のためにアートが使用された訳ではなく、文字通りアート・「プロジェクト」であったということだ。特殊飲食店の氾濫によって崩壊していた地域コミュニティを再生する目的として活動が進められた。それゆえに、作品鑑賞の機会の提供という以上に、多様なワークショップや参加型のアート・イベントが行われたのだった。



写真3 日ノ出スタジオ(2010年8月27日/筆者撮影)

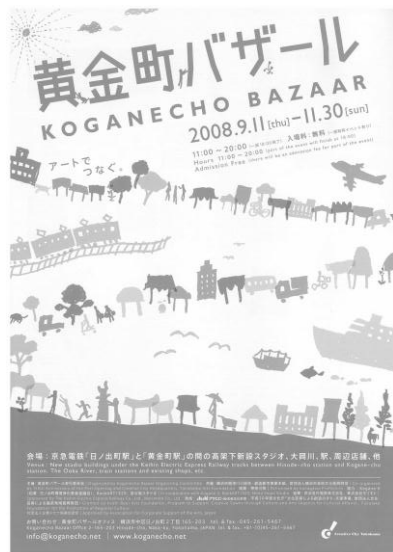


写真4 黄金町バザール ポスター

7 考察

——都市的な寛容性に向けて——

以上、初黄・日ノ出町地区の再生事業について、国・警察の生活安全活動、自治体の創造都市事業の軸線から叙述を行った。最後に、まとめとして現代社会における都市の文化的空間をめぐる理論的知見を援用しながら、本事例における考察と展望を提示したい。

都市を形作る文化は、人々のイメージや記憶の源として機能し、結果、都市空間の中で誰がその場所に属するものであるか、ふさわしいものであるかを象徴的に表すフレームとなる

(Castells 1983=1997: 533-4; Zukin 1995: 25)。重要なのは、現代社会において都市の文化は、文化的消費に代表される経済、集合的アイデンティティの動揺、流動性の高まりなどによる社会的不安といった諸種要因に大きく影響を受けるという点である (Castells 1983=1997; Harvey 1989=1997; Zukin 1995)。

ハーヴェイは、都市経営において文化に収斂する構造的背景を資本の観点から明らかにしている (Harvey 1990=1999)。1970年代以降の産業の脱工業化の中で、世界中のあらゆる都市は、産業のニッチを求めて様々な可能性を模索する。観光業などの集客による外貨の獲得、都市のアメニティーを洗練させることによって、企業誘致など流動資本の獲得、また情報産業・ハイテク産業・文化産業などの新たな産業のニッチの探求など、非重化学工業的な産業の構造化が進展する。アートや快適な生活環境などの経済の領域における文化的要素は、現代社会の都市間競争の中で重要な位置を占めている。

また、ズーキンが指摘しているように、ガードマンや監視装置の設置によるセキュリティの問題も、現代の都市の文化的空間を形成する源となるものである (Zukin 1995: 2)。ズーキンが、「恐怖の美学化 aestheticize fear」と述べるように、現代の文化的空間には、安全・安心のリスク管理が不可避のものとなっている。

初黄・日ノ出町の場合、再生の嚆矢には住民の運動があった。しかし、再生を推し進めた運動の背景には、近年の警察による安全・安心の潮流と、創造都市という行政の2000年以降の成長戦略があった。その中で、黄金町で作り出されようとしているアートの空間は、警察によるリスク管理と行政の成長戦略という、管理的な諸力との近接関係が見られる。黄金町は、こうした現代社会の都市文化を形作る要素が、集中的に出現した事例であった。それは、特殊飲食店の密集地区という事例の特集性に起因するものであった。

見逃してはならないことは、黄金町の再生事業は、現代社会の文化的都市経営の潮流にのった手法であったがゆえに、根強く残っていた地

域の暗部を除去し得たということである。なぜなら、集約的・管理的な手法でなければ、いたちごっこが続いてきた不法活動を取り除くことはできなかった。それゆえに黄金町という事例に限っては、現代社会の潮流を効果的に接合することで、都市空間再生の第一歩を踏み出す優れた実践につながり得たのである。

しかし、逆を言えば、黄金町でとらえた手法や、その背景にある都市空間の現代的潮流は、もしそれを一般化しようとするならば、管理的色彩が強すぎるものとなるだろう。一般化された文脈では、我々は文化的空間が管理的な諸力と結びつく現代社会の潮流には批判的である必要がある。

こうした文脈の中で、黄金町で2009年に開かれたシンポジウムの中で、アーティストの川俣正と山野のやりとりは大変興味深い。ちなみに、川俣と山野は20年来のつながりがあり、川俣は2005年の横浜トリエンナーレの総合ディレクターであった。川俣は、トークの進行上、「場を盛り上げるために」意図的にネガティブな発言をすると前置きをしながら、黄金町で行われる行政も介入する形で進められるまちづくりのアートに関して次のように述べた。

アートが良い子になっている感じで、まちおこしにせよアートの力にせよ「アートで元気の出るまちっていうんだけど、アートってそんなにいいことだったのかな」と非常に疑問に思っていて、僕はアートは、もっと危険なものだと思っています。根源的には僕はそう思っていて、「アートって多分やくざよりもっと怖い、アーティストってやくざよりもっとすごい人だ」と思っているところがあって、だって、人身売買以上のものをやるわけでしょう。それで価値観が変わってしまうくらいのことをやるわけだから。それが偽善的に見えてくると、すごくつまらなくなってしまう感じがします。(黄金町バザール実行委員会 2008 2009: 116)

また、アート・プロジェクトによって進められる街の変化に関して、下記のように違和感を述べる。

ジェントリフィケーション自体の危険性は、ひょっとすると黄金町にもあるのかもしれない。こうやってアーティストが入ってきて、「レジデンスで、文化で、アートアート」と言って、けっこう色々なメディアが取り上げると段々と地価が上がってきて、そのうちどこかでまた違うものが違う街で展開するので、黄金町には違うものが入ってくる。（黄金町バザール実行委員会 2008 2009: 117）

それに対して、山野は、こうした考えを以前にも何度となく川俣から聞いていることを述べつつ、『それを知った上でお前やっているの』と言われたら、『うん知った上でやっています』と言わざるを得ません」と応えている（黄金町バザール実行委員会 2008 2009: 119）。なによりも、「今例えば『最初にアーティストが入ってきて、それで、町がきれいになって、それから』というストーリーにある危険性」を日々感じながら仕事を進めているという（黄金町バザール実行委員会 2008 2009: 119）。

また、地域住民達の間でも、初黄・日ノ出町で構築されつつある空間について、町が完全に浄化されることについては違和感が述べられている。黄金町の再生に関する誌上座談会の中で、作家の山崎洋子は、安全は生活の基本であるが、安全のために地域をきれいにしてしますぎることによって、地域のおもしろみがなくなる、と述べている（黄金町バザール実行委員会 2008 2008: 151）。また住民の一人は、「確かに警察が安全をつくっているのですが、その警察と地元では少し、立場が違うところもあるのです。警察では小規模店舗を全部きれいに、と考えていますが、我々は、風俗街のイメージは消しても、建物そのものは何とか生かせないかと」、述べている（黄金町バザール実行委員会 2008 2008: 151）。また、ある住民は、誌上で、「もちろん、

こういう町があるのはいいことではない。だがよそ者を受け入れてきた横浜の懐の深さみたいなものが、どこかこの町にはあるのかもしれない」¹⁵⁾と述べている（『朝日新聞』1990年1月14日朝刊神奈川面）。

我々が、管理の近傍に位置づく現代の文化的空間や浄化された空間に違和感を持つとき、消し去られた猥雑な空間にノスタルジーを感じるかもしれない。確かに、横浜のアンダーグラウンド文化は、体験として魅力的に映ることもある。しかし、重要なのは、マテリアルな位相で支えられる還元的な思考に収束しないことである。上述の住民の証言は、まさにこのことを考えるきっかけとなる。我々は、路地裏やどこか危険な香りのする場所といった猥雑な空間の、外見や、雰囲気は惹かれているだけではない。むしろ、都市の暗闇に身を置くと、多様なものを受け入れ、ふと思ひもよらぬ何かに出会えるような、都市の「懐の深さ」にときめいている。都市の闇が持つ包容力を、暗部における景観の形態や状況の魅力として語るのではなく、その空間の寛容性を考えることが求められるだろう。黄金町の再生事業においても、現在までに達成された街の空間をさらに有意義なものとしていくためには、消し去られた街の見かけのノスタルジーを再現することではなく、都市の暗部が体現しえた寛容性を、いかに新たな空間に組み込んで行くかが、次なる課題となるのである。

付 記

本稿の作成にあたり、横浜市 APEC・創造都市事業本部創造都市推進課の仲原正治氏、および横浜市都市整備局都市再生推進課の大堀剛氏にご協力いただいた。報告原稿をはじめとした諸種の資料を提供していただくなど、本稿を作成する上で大きな助けとなった。そのお心遣いに、感謝申し上げます。

注

- 1) 本稿では、「芸術」と表現される近代以降の象徴的表現・鑑賞活動の、現代的で多様な変化を射程に収めるため、「アート」という言葉を使用する。西村清和は、「現代のわれわれの美的な文化状況が、もはや伝統的な『芸術』ではとらえきれなくなっている」ゆえに、「芸術」ではなく「アート」という言葉を使うことを提案している。(西村 1995)。インスタレーションなど現代社会における多様な作品形態を鑑みるとき、作品と鑑賞者といったような、近代的な鑑賞形態を連想させる「芸術」という言葉は十分ではではない。また、表現活動が作品の鑑賞という文脈以外にも、映画などのメディア・コンテンツ、服飾といった文化産業、パブリックアートなど都市の景観デザインなど、文化の消費という文脈だけでなく、経済的な生産の文脈でも重要な位置を占めるようになった現代社会において、芸術という言葉だけで十分に表現することもできない。表現者・作品・鑑賞者という近代的な芸術活動を中心としつつ、文化産業や都市デザインなど、脱領域的で多様な展開を見せる一連の表現活動を、ここでは「アート」という言葉で理解する。
- 2) 新潟県十日町市・津南町にて2000年から開催されている大地の芸術祭は、こうしたアート・プロジェクトをめぐる今日の代表的事例である。
- 3) 横浜市の行政職員は、黄金町で進められている事業に対して、芸術不動産事業という言葉を用いていた。本稿では、基本的に「アート」という言葉を使うことは先に明示したが、横浜市の行政側から黄金町のアート・プロジェクトを位置づける際に限定して、芸術不動産事業という言葉を使用する。
- 4) 調査は、2008年11月4日・10～11日、2009年8月5日、2010年6月15日、2010年10月25～29日に行った。具体的には、各種イベント・協議会への参加、黄金町界隈の建築物の状況を調べるためのフィールドワーク、インタビュー調査（行政職員：横浜市創造都市推進課、都市整備局、NPO：BankART1929、黄金町エリアマネジメントセンター、寿クリエイティブ・アクション、地域住民）などである。インタビュー調査は、半構造化された質問項目を中心に、40分～1時間程度、それぞれ各1回程度行った。
- 5) 初黄・黄金町界隈の第二次大戦後の歴史については、中区制50周年記念事業実行委員会編（1985）、「中区わが街」刊行委員会（1986）、黄金町バザール実行委員会（2008）に掲載されている「インタビューⅢ 戦後の問題を振り返って」（p.122～p.123）によっている。
- 6) かつての初黄町飲食店組合理事町などの話によると、「麻薬無法地帯として問題になったのは、昭和37年から39年の中間ぐらいまで」であったという。その後は、法律の強化などによって沈静化していった（黄金町バザール実行委員会 2008 2008: 122-3）。
- 7) 2005年の特殊飲食店分布図は、横浜市都市整備局の大堀剛の作成した資料を元に作成している（2009年7月9日報告資料より）。それ以外の、1995年、2000年、2006年に関しては、ゼンリン住宅地図を元に、特殊飲食店と思われる店舗名をマッピングしていった。黄金町の特殊飲食店名は、「恵美」、「Puffy」など特殊であり、ある程度は、住宅地図からも判別可能である。なお当時の新聞を見ると、2005年の一月以降の摘発後ほとんどすべての店が閉店していたことが記述されている（『朝日新聞』2005.4.3朝刊、田園・浜・川・2地方面；2005.4.20朝刊、田園・浜・川・2地方）。本稿では、ゼンリン住宅地図を元に地図を作成したため、新聞に記されているような実情との乖離が見られたと考えられる。本地図の理解に当たって、1995年、2000年、2006年の地図上のプロットは、店舗分布のある程度の傾向を表すのみであり、当時の飲食店の開店状況を厳密に示すものではないことに注意されたい。
- 8) ちなみにその11地区とは、薄野（札幌）、池袋、渋谷、六本木（東京）、関内・関外（横浜）、

- 栄周辺（名古屋）、木屋町周辺（京都）、ミナミ（大阪）、流川・薬研堀（広島）、中州（福岡）である（都市再生本部 2005）。
- 9) 黄金町の集中的な取り締まりは、1990年にも神奈川県警、伊勢佐木、南署、東京入国管理局による大規模なものがあつた。1991年の5月には、警察、自治体、地元住民、京浜急行黄金町地区風俗浄化対策推進協議会も設置されている（『朝日新聞』 1991.5.10 朝刊、神奈川県）。
- 10) 2010年10月25日、横浜市都市整備局大堀への聞き取りから。
- 11) 2010年6月25日、横浜市創造都市推進課仲原への聞き取りから。
- 12) ここでの事実認識は、横浜市都市経営局政策部政策課（2002）、「クリエイティブシティ・ヨコハマのこれまでとこれから」編集委員会（2008）、野田（2008）、横浜市都市経営局調査・広報行政課（2008）。
- 13) 関内区域の衰退は、近年突然誕生したのではなく、1928年の横浜駅の移転問題という、歴史的な背景のなかで蓄積されたものであつた。1928年以前、横浜駅は現在の桜木町駅の場所であり、都市の活動の中心も桜木町界隈にあつた。しかし、横浜駅が移動して以降、中心地区は桜木町以北に移動していった。結果として、横浜の市街地は主要な二つの地区、一つは現在の横浜駅界隈、もう一つは桜木町界隈から構成されることになった。1965年に提案された、みなとみらい21プロジェクトも、二つに分かれてしまった横浜市の都市空間を接合する開発を意図したものであつたが、このプロジェクトは失敗に終わってしまう。現在の横浜駅周辺、みなとみらい周辺の経済活動が活発になるだけであり、結局関内界隈が成長は困難になってしまった。1990年代以降、バブル崩壊もあいまって、関内区域の衰退は、一層進展していたのであつた。
- 14) 横浜市との交渉の中で進められた事業であり、設計者などは横浜市によって選定されたものであるが、高架下スタジオそのものは、京浜急行が建設・所有している。スタジオは、横

浜市が京浜急行から10年間の定期借家という形で使用されている（聞き取りは2010年10月26日、横浜市創造都市推進課仲原から教示を得た）。

文 献

- 美術手帖, 2008, 『美術手帳 アートシティヨコハマガイドブック』914.
- Castells, Manuel, 1983, *The City and Grassroots: Across-Cultural Theory of Urban Social Movements*: Berkeley & Los Angeles: University of California Press. (=1997, 石川淳志・吉原直樹・橋本和孝訳『都市とグラスルーツ』法政大学出版局.)
- Harvey, David, 1989, "From Managerialism to Entrepreneurialism: the Transformation in Urban Governance in Late Capitalism," *Geografiska Annaler. Series B. Human Geography*, 71 (1): 3-17. (=1997, 廣松悟訳「都市管理社主義から都市企業家主義へ——後期資本主義における都市統治の変容」『空間・社会・地理思想』2: 36-53.)
- 初黄・日ノ出町環境浄化推進協議会, 2004-2006, 『初黄・日ノ出町まちづくりだより 1-8』.
- 初黄・日ノ出町環境浄化推進協議会, 2006, 『初黄・日ノ出町まちづくりニュース 9-10』.
- 初黄・日ノ出町環境浄化推進協議会, 2007-2009, 『Kogane-X まちづくりニュース 11-19』.
- 北沢猛, 2008, 「《1》都市構想を立案する意義～創造都市横浜構想は未来社会の起点～」『調査季報 Vol.163』横浜市都市経営局調査・広域行政課.
- 黄金町バザール実行委員会 2008, 2008, 『黄金町バザールガイドブック+読本』.
- 黄金町バザール実行委員会 2008, 2009, 『黄金町バザールレポート』.
- 「クリエイティブシティ・ヨコハマのこれまでとこれから」編集委員会, 2008, 『クリエイティブシティ・ヨコハマのこれまでとこれから』BankART1929.

- 三鬼商事株式会社, 2009, 「地域別オフィスデータ 横浜 年次データ」(2009年7月3日取得 <http://www.e-miki.com/data/index.html>.)
- 中区制 50 周年記念事業実行委員会編, 1985, 『横浜・中区史——人びとが語る激動の歴史』. “中区わが街” 刊行委員会, 1986, 『中区わが街——中区地区沿革外史』.
- 中田宏, 2002, 「これらかの市政の方向について～横浜新時代・民(みんな)の力が存分に発揮される都市の経営を目指して～」『平成14年5月29日 平成14年第2回市会定例会における施政方針演説からの抜粋』(2009年6月29日取得 <http://www.city.yokohama.jp/se/mayor/policy>)
- 西村清和, 1995, 『現代アートの哲学』産業図書.
- 野田邦弘, 2008, 『創造都市 ヨコハマの戦略——クリエイティブシティへの挑戦』学芸出版社.
- 佐藤郁哉, 1999, 『現代演劇のフィールドワーク 芸術生産の文化社会学』東京大学出版会.
- 鈴木伸治, 2008, 「《8》創造都市の新たな展開～旧特殊飲食店街初黄・日ノ出町地区の再生へ向けて～」『調査季報』163: 64-9.
- 鈴木伸治, 2009, 「文化芸術による地区再生と安全・安心のまちづくり——横浜市中区黄金町の事例から」『都市計画』58 (6).
- 鈴木伸治ほか, 2010, 『黄金町読本2010』.
- 田邊順一, 2008, 「まちの匂い(2)「負の記憶」からの蘇生——横浜市中区黄金町、初音町、日ノ出町」『ガバナンス』85: 1～5.
- 都市再生本部, 2005, 「都市再生プロジェクト (第九次決定) 防犯対策等とまちづくりの連携協働による都市の安全・安心の再構築」都市再生本部ホームページ (2010年10月24日取得 <http://www.toshisaisei.go.jp/03project/dai9/kettei.html>)
- 八木澤高明, 2006, 『黄金町マリア ヨコハマ黄金町路上の娼婦たち』ミリオン出版.
- 山野真悟, 2010, 「黄金町の再生への取り組み」『地域開発』544: 42-47.
- 横浜市開港150周年・創造都市事業本部, 2006-2010, 『事業概要』(2010年7月4日取得 <http://www.city.yokohama.jp/me/keiei/souzou/outline/estimate.html>)
- 横浜市行政運営調整局財政部財政課, 2006-2010, 『予算案について』(2010年7月4日取得 <http://www.city.yokohama.jp/me/somu/zaisei/yosan/>)
- 横浜市都市経営局調査・広域行政課, 2008, 『調査季報 横浜の政策力 特集 創造都市横浜』163.
- 横浜市都市経営局政策部政策課, 2002, 「文化芸術・観光振興による都心部活性化検討第2回委員会 2002-1209 委員会資料」(2009年6月24日取得 <http://www.city.yokohama.jp/me/keiei/seisaku/bunkageijutu/bunkaiinkai.html>)
- 吉原直樹, 2007, 『開いて守る 安全・安心のコミュニティづくりのために』岩波書店.
- Zukin, Sharon, 1995, *The Culture of Cities*, Cambridge: Blackwell.
- , 2009, *Naked City*, Oxford: Oxford University Press.

(東北大学大学院文学研究科・博士後期課程/社会学)

The current urban regeneration projects utilizing arts in Hatsuko-Hinidecho districts in Yokohama

SASAJIMA Hideaki
Tohoku University

The urban regeneration projects utilizing arts have emerged in cities in Europe and America since the 1970s onward. According to previous studies (Harvey 1989; Zukin 1995), cultural activities have been one of the important factors to constitute cities since then.

This paper focuses on regeneration projects by arts in Kogane area from 2000 onward in Yokohama. There were multi-ethnic sex trade shops in Kogane area until recently. The local government banned these activities along with police and local community organizations in 2004. After the removal, the local government built art studios and initiated partnership-based programs with NPO.

On methodologies, this paper deals with the documents of local governments, NPO and local residents. In addition, where necessary, interviews with officers in local government, NPO leaders and local residents were conducted.